アーカイブ室新聞　（2010 年 5 月 19 日　第 334 号）

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室　中桐正夫

＊　10m パラボラアンテナ解体時の写真発見

東京天文台で電波天文学が始まって間もなく、1953 年（昭和 28 年）には表記の 10m パラボラ電波望遠鏡（写真 1）が建設された。この電波望遠鏡は太陽電波の強度、偏波、デシメートル波帯観測用であった。電波天文学に疎い筆者にはこのような書き方しかできないが、この 10m パラボラ電波望遠鏡は三鷹の望遠鏡の雄であった。

写真 1　ありし日の 10m パラボラ電波望遠鏡

この望遠鏡は見た目にも美しく、写真にもよく撮られ、絵葉書の材料にもなった。しかし、1969 年野辺山太陽電波観測所完成を機に太陽電波の主力は野辺山に移動し、三鷹には宇宙電波部が設置され、この望遠鏡は放置される運命になった。そして建設から 20 年も経ると危険だということで解体されてしまったのである。

今年の 3 月末で定年を迎えた西野氏が懐かしい写真が出てきたと、この望遠鏡の解体時

の写真を提供してくれた。美しく聳え立っていたパラボラは鉄くずの山と化した写真である（写真 2）。

写真 2　10m パラボラ電波望遠鏡の解体時の写真

解体され、しばらくはコンクリートの架台は残されていたが、何時しかこれも解体された。ひょっとすると自動光電子午環の建設時に架台は処分されたのかもしれないが別の機会であったかもしれない。

写真 2 の左に写っている木造のみすぼらしい建物が、当時「ノイズ」と呼ばれた天体電波グループの城であった。当時はどの研究室もこのような貧相な木造平屋建ての研究室であったのである。太陽関係者の「3 号館」、子午線グループの「辻研」、天文時の経度グループの建物は三鷹国際報時所の跡地の木造平屋にいたのである。昭和 20 年（1945 年）2 月の本館消失から、昭和 41 年（1966 年）の新本館が建設されるまでの 20 年間は、台長室、事務室は台長官舎（14 号官舎）にあったし、本館（一）、本館（二）も木造平屋建てであった。

今の研究者には、写真 2 のような貧相な研究室の建物は想像を絶するものであろう。そしてこんな建物の研究室に就職を希望するかどうか疑わしい。この木造の建物の前に池があり、その池のほとりに枝垂れ桜が 1 本植わっていた。これは「ノイズの桜」と呼ばれていた。その枝垂れ桜が、台長室の西の中庭に生き残っており、毎年定年退職の卒業生の記念撮影が、この満開の枝垂れ桜を背に行われた。長年卒業生を温かく見守ってくれたのだが、今年の退職者を送る記念写真は残念ながら、この場所では撮影されなかった。この美

しい10mパラボラ電波望遠鏡を主題とした東京天文台のスケッチの絵葉書があった(写真3、4)。

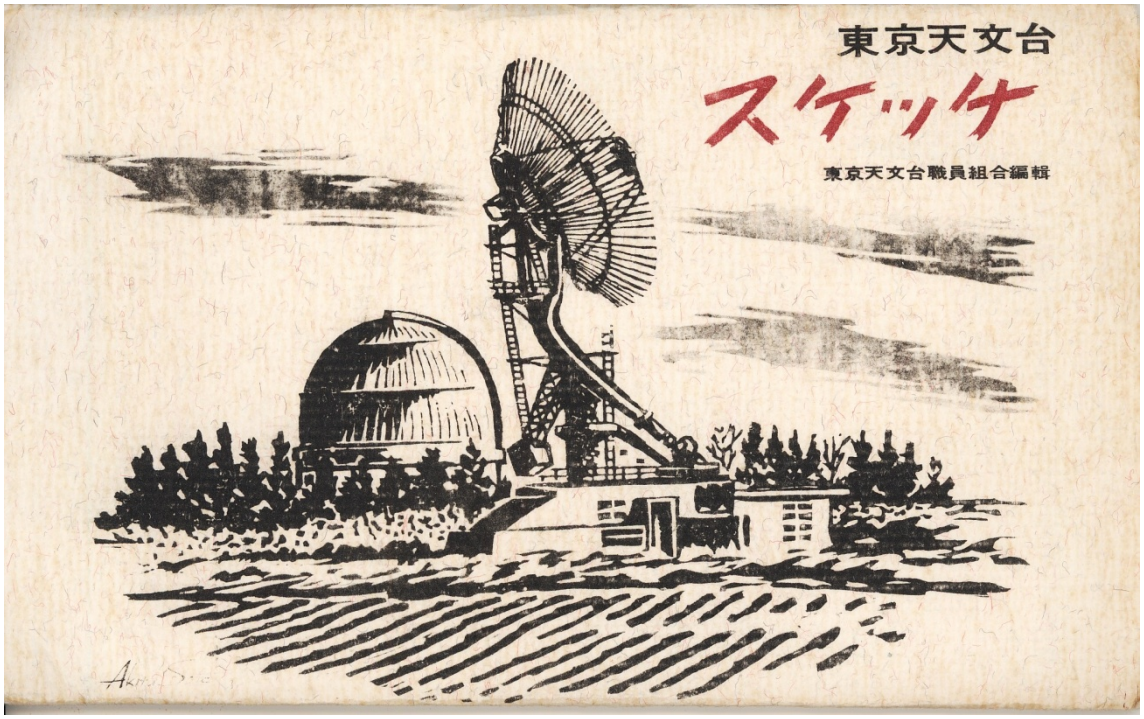

写真3　スケッチ絵葉書集の表紙

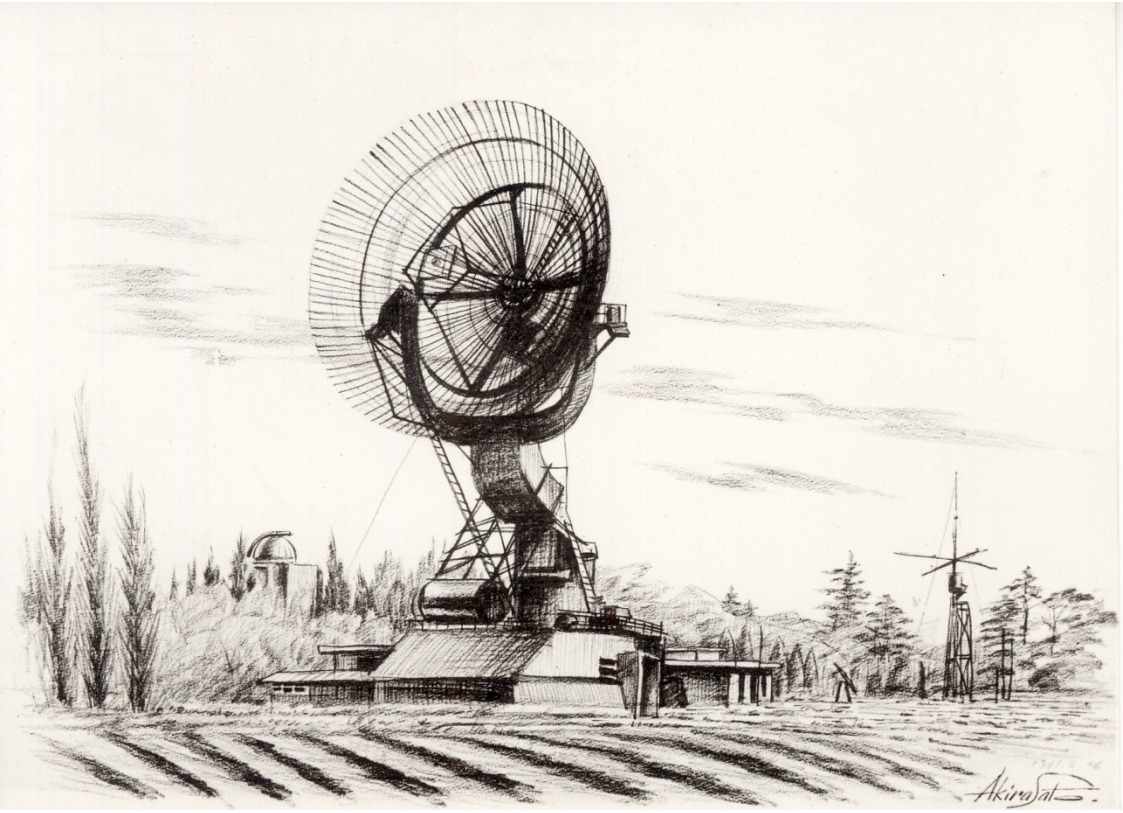

写真4　遠くにタワー（塔望遠鏡）を見る10mパラボラ電波望遠鏡